

## 和泉式部日記三条西本の入れ句

### 一

和泉式部日記の伝本の中、三条西本と応永本とはかなり対照的な本文を持っている。この両者と寛元本を加えた三者のかかりあいをはきわめて複雑である。その先後関係、本文のよしあしなどの問題に言及するためには、よほどの準備が必要であろう。小論においては系統論から一応はなれるが、三条西本と応永本の本文の特性を説明するため一つの手がかりを、三条西本の入れ句に求めてみた。

「入れ句」というと、もとの本文があり、それを筆者があとから推敲する際、または後人が書写する際に、補足した語句という意味になるうか。しかし、小論においては、そうした先後関係を問題にする前に、まず二本―三条西本と応永本―を対校し、一本にのみある語句を入れ句とみた。

応永本の入れ句は、作中人物の行動、心理などについて補足的に説明する働きが多いようである。それに比較して三条西本の入れ句はいかがであろうか。以下において私が検出した三条西本の入れ句について少しく考察し、それぞれの語句の働きを明らかにしたい。なお、本稿で取り上げる入れ句の字数は、三条西本で三字以上九字以内のものに限定した。ただし、語句の倒置によりそれぞれ入れ句となるもの、敬語の異同で字数に差が生じたものなどは取り上げない。

伊藤 博

### 二

三条西本の入れ句を次に示す。なお、引用本文の底本は三条西本で、右側に応永本との校異を示した。なお、引用本文の後の（ ）内の数字は三条西本の丁数である。

(1) しかおはしませといとけちかくおはしましてつねにまいるやとゝはせおはしましてまいり侍はへりと申候侍つれば（一ウ）

右は小舎人童の会話の一部分である。「つねにまいるや」は、その会話の中に引かれた宮のことばである。宮は童にむかつて、女の所に「つねにまいるや」と問う。それに対して童は「まいり侍」と答える。この「つねにまいるや」で、応永本は「つねに」がない。つまり、三条西本では入れ句となっている。右の童の会話は、女の質問に答えたものであるが、この童の会話のある前に、女は童にむかつて、「なとかひさしくみえさりつる」と言っている（応永本は「なとかいとひさしくみえさりつる」とある）。童はひさしぶりに女の許にあらわれたのであるから、宮の質問「つねにまいるや」に対して、童が「まいり侍」と応答するのは少々矛盾する。もっとも、童は宮の質問に対して適当に答えたと解すれば、三条西本は前文と矛盾するとはい

いがたい。しかし、応永本のように「つねに」がなく、単に「まいるや」とだけあるほうが矛盾のない言い方とみてよからう。

(2) たちはな<sup>み</sup>の花をとりいてたれはむかしの人のといはれて<sup>みる</sup>・さらはまいりなんいかきこえさす<sup>せん</sup>へきといへは(二オ)

宮から贈られた橘の花を見て、女は思わず「むかしの人の」と口に出る。童は役目を果たしたのであらう、「さらはまいりなん」と言う。応永本にはこの「さらは」がなく、急に「まいりなむ」と言い出す形になっている。前文とのかかわり、ことばの間などからみて、三条西本のように「さらは」のあるほうが会話文としては形が整っている。

(3) いか<sup>そ</sup>に・と<sup>と</sup>はせ給<sup>たまふ</sup>・に御ふみをさしいてたれは御らむして(二ウ)

「御らむして」は宮の行為である。応永本のようにこの語句がなくとも、読みの上にさほど支障はない。童の「御ふみをさしいてたれは」という行為から、当然、宮は女の文を「御らむ」になることは予想できる。応永本では、そうした宮の行為は十分に読める。三条西本にある「御らむして」は、単なる附加的語句とみてよからう。

(4) もてきたれはをかしと見れとつね<sup>に</sup>・はとて御返<sup>ふみ</sup>・きこえさせ<sup>たまは</sup>・すたまはせ<sup>また</sup>・また<sup>の</sup>日(二ウ)

「たまはせそめては」は宮の行為について述べたものである。この語句の上にある「御返きこえさせす」は、女の行為である。応永本のように「たまはせそめては」がなくて、すぐに「またの日」につづく、次にある和歌「うちいてゝも」が、宮のものか女のものか少々わかりにくくなる。そこで、三条西本のように「たまはせそめては」が

あるほうが、女の行為から宮の行為に転換したことがよくわかり、文章としては整っているとみてよからう。

もっとも、応永本には「御ふみきこえたまはす」とあり、女の動作でありながら「たまふ」という尊敬語が用いられている。ここは応永本の混乱箇所であるため、少々問題は残るが、現存本文の比較からみて、三条西本には入れ句があることにより、叙述上の無理がなくなっている。

(5) かくてしは<sup>に</sup>のたまはする・御返も時々きこえさす・つれ<sup>ゆ</sup>もすこしなくさむ心ちしてすくす<sup>ある</sup>・ほと<sup>ほと</sup>に(三オ)

「つれ／＼もすこしなくさむ」は、女の微妙な心の変化をいったものである。三条西本には「すこし」があり、応永本にはない。宮の誘いに応じて和歌を贈った女は、自分のことを「もともこゝろふかゝらぬ人にてならぬつれ／＼のわりなくおほゆる」といつている。しかし、宮との何度かの贈答をくりかえすうちに、「ならはぬつれ／＼」も「すこしなくさむ」ようになったのであらう。三条西本には「すこし」という語があることにより、微妙に揺れ動く女の心が伝わってくる。

(6) つれ<sup>又</sup>／＼もすこしなくさむ心ちしてすくす<sup>ある</sup>・ほと<sup>ほと</sup>に又御ふみありことはなとすこしこまやかにて(三オ)

前述の(5)につづく部分である。「ことはなとすこしこまやかにて」は、宮の心づかいをいったものである。(5)の例の「すこし」と同様、に、応永本にこの語はない。右の一節は、宮と女とがまだねんごろになっっていない、恋のはじめにおける二人の様子を述べたものである。それ故、宮が女に贈ることばはまだ「すこしこまやか」というのであらうか。



なお、(5)に示した部分で、寛元本は「つれ／＼もすこしなくさむ」とあり、三条西本と一致している。ところが、右の(6)の部分は「ことはなとこまやかにて」とあり、応永本と一致している。寛元本は「すこし」という語の重複をさけた形になっている。「すこし」の有無をめぐって三者三様になっている。こうした加除の部分から、本文の先後関係を考えることもできようが、この部分だけでは推測を重ねることになろうからさしひかえたい。ただ、「すこし」の有無によって、人物の心的状況、人物のもてなしぶりに、いくらかのちがいが生ずることを指摘しておきたい。

(7)あやしき御くるまにておはしまいてかくなむといはせたまへれは(四オ)

三条西本にある「おはしまいて」は宮の行為である。この語句がなくとも、作品の内容理解にさほどの支障はない。が、応永本のように「あやしき車にてかくなん」とあるよりも、三条西本のほうが文章としては整っている。

(8)のたまひちきりてあけぬれはかへりたまひぬすなはちいまのほともいかゝ・あやしうこそとて(五ウ)

宮ははじめて女の許に訪れた。邸にもどった宮は後朝の文をしたためる。その折の宮の女への思いが、この「すなはち」にこめられている。また、応永本のように「かへり給ぬいまのまは……」と、宮の行為、後朝の文とすぐにつづくよりも、「すなはち」があることから、文章の流れもよくなる。

(9)かへりまいるにきこゆ(六オ)

「きこゆ」は女の行為である。この語がなくとも、読みの上にさほどの支障はない。単なる附加的語とみてよからう。

(10)人／＼あまたさふらひけるほとにて・え御らむせさせすつとめてもてまいりたればみたまひて(七オ)

「みたまひて」は宮の行為である。この語句がなくとも、読みの上にさほどの支障はない。もっとも、上に「え御らむせさせす」とあるため、「つとめて……みたまひて」とわざわざ説明したのであろうか。一方、応永本は「御覽せさせて」とあり、文章は切れずに下につづく形になっている。それゆえ「みたまひて」は不要なのであろうか。いずれにしてもさほど重要な語句ではなく、三条西本の単なる附加的語句とみておく。

(11)あさからぬ心のほとをさりとともとある・御かへり(八ウ)

「あさからぬ……」は宮の文である。それに対する女の返歌を示す前に、「御かへり」という語句がある。これもさほど意味のある語句ではない。

(12)まちとるきしやとぎこえ・たるを御らむしてちかへり(十オ)

女からの文を見た宮は折るかえし「なにせんに」の和歌を贈る。その宮の行為を三条西本は「たちかへり」と説明している。しかし、応永本のようにこの語句がなくとも読みの上にさほどの支障はない。三条西本の単なる附加的語句とみておく。

(13)つれ／＼なれははかなきすさひこと・するにこそあれこと／＼しう人はいふへきにもあらず(十二オ)

女の許に行こうとする宮を侍従の乳母はいさめるが、そのことばに對する宮のいいわけである。応永本は「つれ／＼なれははかなきすさひ事をこと／＼しう……」と一氣に文がつづく。三条西本は「……するにこそあれ」でことばが一度切れる。かなり長い侍従の乳母のことばに對して、抗弁する宮のことばとしては、三条西本のほうが形式的には整っているとみてよからうか。

⑭あやしうすけなきものにこそあれさるはいとくちおしうなとはあらぬ物・にこそあ・れよひてやをきたらましとおほせとさてもましてきゝにく・そあらん・とおほしみたるゝほとにおほつかなりぬ  
(十二ウ)

「あやしう……よひてやをきたらまし」は宮の心中思惟である。宮は乳母のことば「なにのやうことなきゝにはあらすつかはせ給はんとおほしめさんかきりはめしてこそつかはせ給はめ」を受けて、女を「よひてやをきたらまし」と思うようになるのであらう。が、女を呼びよせたなら「ましてきゝにくゝそあらん」と思い、ためらうのである。そうした自分の思いと、世間へのおもんばかりにあれこれと揺れる宮の心中が「さても」にうかがえる。応永本にはないこの「さても」は、前文を受けて次の「まして……」につづける働きもしている。単なる附加的語句ではなく、文脈の上でも意味のある語句とみてよからう。応永本より三条西本のほうが整っている。

⑮さりや人もなき所そかしいまよりはかやうにてをきこえ・・・ん(十三オ)

右は宮の会話の一部分である。月の夜、宮は女を外に連れ出すが、人目を忍ぶゆえ、女に「いさたまへこよひはかり人もみぬ所あり心のとかにものなともきこえん」といって誘う。そして、車を「人もなき

らう」に寄せた宮は、女を無理に車から降ろす。その折、宮は女に「さりや人もなき所そかし」という。はしたなく思いながら車から降りる女に對する宮の心づかいであらうか。三条西本にある「さりや」は、前文にある「人もみぬ所あり心のとかに」(この文は応永本との異同はない)を受けたものである。三条西本にある「さりや」という宮のことばから、ためらいがちな女の気持ちをおもんばかりの宮の心づばりが読みとれる。

⑯けさは・・・かりつる鳥・音・のねにとろかされてにかりつれはころしつ・・・・・との給はせてとりのはねに御ふみをつけて(十四ウ)

まず、応永本が「とて」とあるところ、三条西本は「との給はせて」とある。三条西本には敬意が加わるが、文意、文脈にさほどのちがいは生じない。次の「御ふみを」が応永本にはない。つまり、応永本では「はねにかきて」となり、三条西本では鳥のはねに「御ふみをつけて」となる。応永本で読むなら、直接はねに文を書きつけたことになる。この点については、すでに発表させていただいた。「和泉式部日記応永本とところどころ」(八上村悦子氏編『論叢王朝文学』・笠間書院・昭和五十三年)。

⑰と思たまふるもにくからぬにや」までは女の宮への返事である。いみしうあかき夜(十五オ)

「と思たまふるもにくからぬにや」までは女の宮への返事である。その返事のあと、三条西本は「とあり」がある。応永本のように「とあり」がなく、すぐに「三日程ありて」とつづく形よりも、返事の部分を「とあり」で受けていったん文を終止させるほうが文章としては落ちつく。



⑱とそきこえさするかくてのちも猶まとを・なり(十六ウ)

応永本の「ときこえさするも猶まとをになん」は、前の文章(宮の歌「つらしとも」と、それに対する女の返歌「あふ事は」)に接続し、「ひさしうのたまはせ」ぬ宮の様子を説明する。一方、三条西本には「かくてのち」があるため、「とそきこえさする」でいったん文章が切れる。そして改めて前の文章を受けて、宮の間違である状態を述べている。しかし三条西本の入れ句は、二人の置かれてある状況を特別に説明するものでもない。

⑲女はまたはしに月なかめてゐたるほとに(十七オ)

「女はしになかめてゐたるほとに」とある応永本よりも、「また」の語のある三条西本のほうが、女の状況がより明確に伝わってくる。なお、右の一文の前には「月のあかき夜うちふして」という女の動作が述べられている。そして女は宮に「月をみてあれたるやとになかむとは見にこぬまでもたれにつけよ」という歌を贈る。その後視点は移動して、宮の様子を伝える。宮は「御ものかたりしておはします」が、右近の尉から女の歌をみせられて、例の車で女の許を訪れる。このような宮の側の様子を伝える文章が間に挿入されていて、いくらかの時間が経過している。しかし、女は「まだ」月をながめているというのが三条西本である。一方、応永本には「また」と「月」の語がない。三条西本のように「月」のあるほうが、前文とのかかわりがより密接となろう。

⑳なによかよと・きこえさする事もなくわさとたのみきこゆ・事・ることこそなけれ(十九オ)

応永本の入れ句「わさと」は下文の「わさとたのみ……」と重複する。三条西本の入れ句「事もなく」は同じく下文の「きこゆることこそなけれ」と重複しである。右の部分、三条西本と応永本との関係は複雑であると思われるので、問題箇所とするにとどめたい。

㉑御文・あるみれはかくそ(二十オ)

三条西本の入れ句「かくそ」も、単なる附加的語句とみてよからう。

㉒つこもりかたに・いとおほつかなく・かし・あれ・は・(二十ウ)

「いとおほつかなく……なめり」は宮のことばである。三条西本では「いとおほつかなく」にけるを、などか時々は。人かすにおほさぬなめり」と読める。一方、応永本のように「時々は」がないと少しく落ちつきのないこととなる。その場合「なとか」で句点とするか、あるいは「人かすにおほしめされぬなめりかし」にかかるか、いずれかならう。三条西本のほうが、宮のことばとしては整っている。

㉓あはれには・かなくたのむへくもなき・かやうのはかなし事・世の中・なかをなくさめてあるも(二十一ウ)

三条西本には「はかなく」があるため、下文の「はかなし事」と同語の反復になる。女のだやう意識、たしかなよるべなき境涯を強調するためのことばづかいなのであろうか。あるいは、応永本は同語の重複を意識的にさけたのであろうか。

(24) いし山にまうてゝ七日はかりもあらんと・てまうてぬ(二十一ウ)

「はかり」があるのだいたいの日数をいうことになろうか。応永本のように「七日あらん」とあると、はっきりと日数をいうことになろう。応永本にはこうした言い方が時折みられる。「七日」と「七日はかり」では微妙な差異が感じられる。しかし、本文解釈上あまりちがいはない。

(25) 御返・たゝかくなむ(二十四オ)

応永本には「かくなむ」がないが、文意はかわらない。三条西本の単なる附加的語句とみてよからう。

(26) 心ほそく・つねよりもあはれにおほえて・なかめてそありける(二十五オ)

「てそあり」を入れ句とした。これも単なる附加的語句とみてよからうか。

(27) 人もなかりけり・そらみゝをこそきゝおはさうとてよのほとろに・まとはかざるゝさはかしのとのゝおもとたちや(二十五オ)

深夜に起こされた召使のことばである。「そらみゝきゝおはさうして」(応永本)とあるよりも、「そらみゝをこそ……」とあるほうが、寝ていた自分を起こした相手に対する気持ちが一層強く表現される。

(28) 女は・やかてあかしつゝいみしうきりたるそらをなかつゝあかくなりぬれは(二十五ウ)

例の「九月廿日あまりばかりの」有明月の一節である。三条西本は「女はねてやかてあかしつ」とあり、これで一文となる。応永本は「女やかてねていみしうきりたる空を……」と文章がつづく。三条西本、応永本とも文意に差はない。ただ、「あかし」という語句の有無により、三条西本は二つの文になり、応永本は一つの文のままである。右に引いた文の前には、「人もなかりけり。……さしかしのとのゝおもとたちや」とねぬ」とある。「ねぬ」という動作をしたのは下働きの男である。この文とのつづき具合からみるなら、「女やかてねて」とあるよりも、「女はねてやかてあかしつ」とあるほうが整っている。

(29) れいの御ふみあるたゝかこそ(二十五ウ)

応永本には「かこそ」がないが、文意はかわらない。三条西本の単なる附加的語句とみてよからう。

(30) このてならひのやうにかき・たる・を・やかて・ひきむすひてたてまつる御らんすれは(二十六オ)

手習文を宮に贈るところである。三条西本はその手習文のあとに「たてまつりたれはうちみ給ひて」(応永本も同文である)とある。三条西本は「御らんすれは……うちみ給ひて」とあり、再叙法のような形になっている。鈴木一雄氏は、「女の長文消息の前後の不整不備も、素材と形成時における統一的把握との間に生じた、わずかな裂け目である」(『全講和泉式部日記・考説(二二)』)と述べておられる。一方、応永本ははじめの「御らんすれは」がない。応永本では意識的に前文の「御らんすれは」が削除されたのであろうか。それとも逆に、三条西本ではあえて再叙法のような形に整えられたのであろうか。これも問題箇所である。



③ 過ぎにしたいま行末・の事・ともかゝるおりはあらしとそてのし  
つくさへあはれにめつらかなり (二十七才)

女が「てならひのやうに」書いた文の一節である。この手習文(結局は宮への消息文となる)は景を叙すとともに、情の濃い文章となっている。かたむく月影、霧りたる空、鐘の声、鳥の音などを述べながら、過去のことを思い、今後の生活を案ずる女の様子に筆は及ぶ。三条西本には「あはれに」の語があり、女の心的状況が具体的に説明されている。情趣的な場面にふさわしいことばの選択がなされているとみてよからう。

③ あはれなることのかきり・の給・はするにかひなくあらす・月  
はくもり・くしくる・ほと也・わさとあはれなることのかきりをつく  
りいてたるやうなるに (二十九才)

三条西本では「あはれなることのかきり」が重複している。応永本では、「あはれなることのかきり」とあるあとは、「あはれなるさま」となっている。応永本のように同語句のくりかえしをさせたほうが、文章としては整っているとみてよからうか。ところが応永本の「つくくしくる」とある箇所は文意不明である。

三条西本の「月はくもりくしくる」のほうが文意は通じる。いずれにしても、右に引いた部分、三条西本、応永本それぞれに問題がある。三条西本にある「のかきり」という語句は特に本文の読みに影響を与えない。が、語句の重複ということはある種の問題を残す。例えば、語句の重複のある本文は推敲以前の形を伝えるものなのか、あるいはあえて同語句をくりかえしたもののなのか、ということである。それに加えて、右の部分では、「月はくもりく」(三条西本)と「つくく」(応永本)のような異質の本文があることから、一層問題は

複雑になり、先後関係、それぞれの本文が生ずる経緯を推測することが困難となっている。

③ なといらへもし給はぬはかなき事きこゆるも心つきなけにこそおほ  
したれ・い・いとをしくとの給はすれは (三十才)

十月、時雨の降る夜の場面である。あれこれと思う女は宮にものもいえずに、ただ涙をこぼしている。そんな女の様子を見て、宮は右のことばを女にかける。応永本は「心つきなしとおほしたるにこそ」とある。この本文では、宮は女の心の中をはつきりと見てとったような言い方である。三条西本では、「心つきなけにこそおほしたれ」とあり、さらに宮は女を思い、「いとをしく」とことばをかける。「たゞ月かけに涙」を落とす女の姿を、「あはれと御らむし」た宮のことばとしては、「いとをしく」があるほうがよからう。宮の女に対するやさしい心づかいがうかがえよう。三条西本のほうが繊細なことばづかいになっている。

④ 時・まい・れはにや・みゆる事・もなけれとそれも人のいとぎ  
にく・いふに (三十一才)

応永本は「まみゆることもなし」(応永本の「まみゆ」は問題のある語)で切れ、下の「人のいとぎにくいふに」につながらないため、ことばの流れが少しぎこちない。三条本のように「……………」なけれとそれも……………」とあるほうが、話し手の気持ちが行き届いたことばづかいとみてよからうか。

⑤ うちなかめられてつねよりもあはれにおほゆかともあけねは御つか  
ひまちとをにや・おもふらんとて御返し (三十六才)

「御返し」は三条西本の附加的語句であろうか。ただしこの「御返し」は視点の移動を示す。宮から「みるや君」の歌を贈られた女は、しばらく「うちなかめられて……」という状態になる。が宮の使が待遠であろうと思ひ「ふけぬらん」の歌を託す。「御返し」があることにより、女の場面から宮の場面へという、場面の転換がはっきりする。

例をかしけなるまゆみの紅葉のすこしもみちたるを御覽しおらせ給ひて（三十七オ）

応永本には「紅葉」という語のくりかえしはない。なお、寛元本は「まゆみのあるかすこしもみちたるを」とある。寛元本も同語の重複をさせている。三条西本の本文に関しては、(イ)「まゆみのすこしもみちたるを」という本文の傍に「紅葉」と書かれていたのが本文に混入したか、(ロ)「まゆみの葉のすこしもみちたるを」という本文に、「紅」が補筆されたかなど、いくつかのことが推測できる。が、三条西本の本文がもとにあり、応永本の書写者が後から「紅葉」を削除したか、ということも考えられる。

後拾遺和歌集に次のような詞書がある。

太政大臣かれぐに成て、四月ばかりに、まゆみのもみちを見て  
よみ侍ける 藤原兼平朝臣母（巻十六・雑二）  
八代集抄の本文による

また、宇津保物語にも次のような例がある。

かくて、まゆみの色／＼いとおかしくなりゆくをみたまふて、  
（楼の下）  
宇津保物語本文と索引の本文による

右のような述べ方があることからみても、三条西本は不審な本文といつてよからうか。三条西本と応永本に関していくつかの推測はできるが、確実なところは不明といわざるを得ない。三条西本の単なる入れ句として処理するには問題の残る箇所である。先述の例同様

に、本文の先後関係を論ずることはさしひかえておきたい。

例しら露のはかなくくときみしほとときこえさするさま・なさけなからすをかしとおほす（三十七オ）

宮の「ことの葉ふかくなりけるかな」につけて、女は「しら露の」と答える。そうした女の応答ぶりを、宮は「なさけなからすをかし」と心引かれる。応永本は単に「なさけなからす」とだけある。三条西本のように「をかし」があることにより、女と感興をともにできる宮の喜びが伝わってくる。

例けふは物いみときこえてとまり・たれは・あなくちおし・これすくしてはかならずとあ・るに（三十八ウ）

「きこえて」が三条西本の入れ句である。三条西本はこの語句があるため、「けふは物いみ」が女のことば、「あなくちおしこれすくしてはかならず」が宮のことばとなる。一方、応永本は「けふは物忌にとちこめられて……かならず」まで一文となり、すべて宮のことばである。

宮は女を紅葉見物に誘う。女は承諾する。ここまでは三条西本、応永本同文である。次から、三条西本では女が物忌のために行けないことわり、それを聞いて宮は「口惜し」と残念がる。一方、応永本では宮が物忌のために行けなくなったとなる。このように入れ句「きこえて」の有無が、それぞれことなる本文を作ることになる。

例たえしころたえぬと思・したまの君により又・おしまるゝかなとあはれはいみ・しきことかな返／＼もとて（四十六ウ）

宮のことばに従い、女はようやく宮邸入りを決意する。その頃、女



は風邪なのか気分がすぐれない日があった。宮は「いかゞある」とたずねる。それに対して女は「すこしよろしうなりにて侍。しばしいきて侍らばやと思ひ給こそつみふかく。さるは」と答える。右に引いた「たえしころ」はそのことばとともに宮に贈られた歌である。宮は女の風邪のよくなったことを知り、それに「君により又おしまるゝ」ということばを見て、素直に「いみじきことかな返くも」と喜び、「たまのをのたえんものはちきりをきしなかにこゝろはむすひこめてき」と返歌する。そうした宮の喜びのことばが、応永本では「いとくうれしき事かな」となっている。「うれしき」という宮の胸中は強く訴えられているが、表現としては平板である。一方、三条西本では「いみじきこと」とあり、「返くも」と附加されて、女の身を案じる宮の心中が巧みに表されている。

④いとかう身の人けなく人わらはれにはつかしかるへきこととなくくきこえ給へは(五十二ウ)

女は遂に宮邸に入った。その女の部屋に行こうとする宮に対して、北の方は「……いとかう身の人けなく人わらはれにはつかしかるへきこと」とことばをかける。北の方の態度を、応永本は単に「きこえ給へは」と説明する。三条西本は「なくくきこえ給へは」と述べている。「なくく」の語があることにより、北の方の様子がより明確になる。

④御気色・あしきにしたかひて中将なとかにくけにおもひたる・むつかしさにかしらなともけつらせんとてよひたるなり(五十二ウ)

④に引いた北の方のことばに対する、宮の返事の一部である。応永本では「御気しきにしたかひて」とだけある。三条西本では「御気色

あしきにしたかひて」とあり、北の方の機嫌の悪さをはっきりと述べている。

なお、この部分、「御けしき」「あしき」とあり、「しき」という字がくりかえされるため、あるいは応永本には誤脱があるかもしれない。しかし、寛元本も「御けしきにしたかひて」とあり、応永本と一致しているので誤脱とは考えずに、三条西本の入れ句として処理をしておく。

④くれぬれはこととはて宮・いらせ給ぬ御をくりにかんたちめ・達・部かすをつくしてぬ給て御あそひ・あり(五十三ウ)

「ぬ給て」が、三条西本の入れ句である。この語句が欠落していても文意はほとんどかわらない。しかし、「上達部かすをつくしてぬ給て」とあるほうが文章の流れはよくなる。表現としては三条西本が整っているともてよからう。

### 三

以上、三条西本の入れ句四十二例について検討した結果を整理すると、次のようになろうか。

第一に、入れ句があることによって、文章の形が整うもの。次の二十一例である。

- |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |
|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| (2)  | (5)  | (7)  | (8)  | (13) | (14) | (15) | (16) | (17) | (19) | (22) | (27) | (28) | (31) | (33) |
| (34) | (37) | (39) | (40) | (41) | (42) |      |      |      |      |      |      |      |      |      |

第二に、単なる附加的語句とみてよいもの。次の十二例である。

- |     |     |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |
|-----|-----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| (3) | (9) | (10) | (11) | (12) | (18) | (21) | (24) | (25) | (26) | (29) | (35) |
|-----|-----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|

右の十二例の多くは、消息(和歌)の前後にあることばであって、そのほとんどが「御らむして」「きこゆ」「みたまひて」「御かへり」「かくそ」などとある。これらの語句はなくとも、本文の読みにほとんど支障がない。

第三に、右の二つの項目に入れがたいもの。次の九例である。

(1) (4) (6) (20) (23) (30) (32) (36) (38)

右の九例のうち、(1)の入れ句はないほうが、むしろ前文との矛盾がなくなる。しかし、論理的に読む必要はなく、ことばのあやとみるなら、矛盾を指摘することもなからう。

(4)は敬語がからむところで、応永本の誤写箇所と考えてもよいが、一応、問題の残るところとしておきたい。

(6)は三条西本のほうが応永本よりも、人物の微妙な心理状態を表現しているので、第一の項目に入れてもよいところである。しかし、語句の重複という点からみると、三条西本にややくどさが感じられる。三条西本と応永本とは、どちらの本文がより整っているのか決めがたい。

(20)、(23)、(30)、(32)、(36)はいずれも同語句がくりかえされている(30)は必ずしも同語句ではなく、類語であるが)。もし同語句の重複が文章としては、まだ推敲されていない形を伝えるものとするなら、応永本に推敲の痕跡をみることができ。しかし、その逆のこと(同語句のくりかえしによる表現効果をねらった)も推測できるので、問題はきわめて複雑といわざるを得ない。

(36)は入れ句の有無によって、文が一文か二文かにわかれる。本文の整、不整については言及しがたい。

右に述べたことにもとづき、三条西本の入れ句の働きについてまとめると、ほぼ次の三通りにならう。

(ア)前文とのかかわりが密になり、整った表現となるもの(叙述上の無理がなく、文章の流れがよくなるもの)。

(イ)人物の心理状態をより繊細に伝えるもの。

(ロ)人物の動作をより明確にするもの。

つまり、三条西本の入れ句は、第一の特性として示した、叙述を整えるものもとても多い。ただし、三条西本にも第二の特性を示すもの――単なる附加的語句――もあり、入れ句のすべてが文章の不整不備を

正し、繊細な神経の行き届いた表現を作るわけではない。大体の傾向としては、文章を整えるもの、人物の微妙に揺れ動く心理状態を伝えるものなどが多いといえよう。こうした三条西本の入れ句の存在を、添削の痕跡とみることができようか。ところが、一方では第三に示した九例が問題となる。語句の重複をさける叙述は後の本文と仮定するなら、三条西本には古い形の面影が残されていることにならう。その逆で、同語句をくりかえすことによって形を整える、またはある種の表現効果をねらうとするなら、三条西本に加筆の跡をみることができよう。それ故、これら九例の入れ句の有無によって本文の先後関係を論ずるのは非常に困難といわざるを得ない。

小論では次のことを結論とするにとどめたい。三条西本には冗漫な入れ句も時折みられるものの、その大半は本文の不整不備を補正する働きをしている。それらのうちのいくつかは、後の添削によるものもあろうか。

〔附記〕小論で引用させていただいた応永本は、京都大学文学部蔵本である。なお、誤写と断定できる箇所については、宮内庁書陵部蔵本を参照した。